

フォーマット

A部門

肯定側第一立論	_____	6分
否定側質疑	_____	3分
否定側第一立論	_____	6分
肯定側質疑	_____	3分
肯定側第二立論	_____	6分
否定側質疑	_____	3分
否定側第二立論	_____	6分
肯定側質疑	_____	3分
否定側第一反駁	_____	4分
肯定側第一反駁	_____	4分
否定側第二反駁	_____	4分
肯定側第二反駁	_____	4分

準備時間：各チーム10分

B部門

肯定側立論	_____	6分
準備時間	_____	1分
否定側質疑	_____	3分
準備時間	_____	2分
否定側立論	_____	6分
準備時間	_____	1分
肯定側質疑	_____	3分
準備時間	_____	1分
否定側第一反駁	_____	4分
準備時間	_____	4分
肯定側第一反駁	_____	4分
準備時間	_____	4分
否定側第二反駁	_____	4分
準備時間	_____	3分
肯定側第二反駁	_____	3分

日本ディベート協会主催

第4回

日本語ディベート大会

日時：1998年3月21日 9時20分～

場所：神田外語大学四号館

ごあいさつ

本ディベート大会も第4回を迎えることができ全国でディベート活動を実践しておられる人々の間に定着してきたのではないかと思います。今回はさらに大会への関心を高めるために、日本ディベート協会の推薦論題を用いる部門と、「ディベート甲子園」の高校の部の論題を用いる部門を設けました。各部門とも現代社会の重要な問題を論題に取り上げています。皆様には、試合としてのディベートを楽しんでいただくとともに、「刑事裁判における証拠のあり方」、「安楽死の法制化」という重要な問題について考える手がかりを得ていただければ幸いです。

ディベートは単なる「言い争い」でもなく、さまざまな意見が飛び交う「討論会」でもなく、ルールに従って議論する活動です。まだディベートになじみのない方は大会を観戦されて戸惑われることもあるかと思いますが、少し解説をしておきます。

ディベートは、定められた論題について賛否両論を周到に準備し、双方の論点を吟味することによって、よりよい意思決定をするための話し合いです。この大会のように競技として行われるディベートでは、肯定・否定の立場は籤などで決められ、参加者の個人的な意見を反映するものではありません。試合は、ディベートの専門家の審査員によってその試合の中で交わされた議論の優劣にのみ基づいて判定が下されます。議論の優劣は、問題分析的確さ、証拠資料の質、論理の正確さ、などによって判断します。

議論はすべて口頭で発表しますが、話し言葉がすべてではありません。出場者は証拠資料の引用や、立論の原稿を用意しています。出場者も審査員も試合中は詳細なメモを取って議論の流れを記録しています。

問題の分析では、現実世界の議論を反映していることはもちろんですが、時には普通は思い付かないような論点を追求したり、常識とされる価値観を疑ってみることもあります。一見荒唐無稽な議論もそこから、問題のより深い分析や新たな解決策への手がかりが得られることもあるでしょう。

このようなディベートは実社会では合理的な意思決定の手段として用いることができます。教育・研修の手段としては、論理的な思考、問題分析の手段、効果的なコミュニケーションの方法、などを訓練するのに有効です。このような技術や能力は、国際社会においてのみならず日本国内においても、多様化・対立化する価値観を持った人々と相手の立場を認めながら議論していくために不可欠です。ディベートがますます注目を集めるのも納得できることです。

主催者である私たちの組織も、昨年から名称を「日本ディベート協会」と変更し、日本におけるディベート活動の普及・発展にさらに積極的な活動を展開していきたいと存じます。このディベート大会の開催だけでなく、新たに、ディベートセミナーを通じての啓蒙活動も始めました。すでに、先日東京で「一日ディベートセミナー」を主催しました。今後さらにこういった活動を広げていきたいと存じます。

井上 奈良彦

日本ディベート協会会長
井上奈良彦
(九州大学助教授)

論題

A部門：「日本政府は、刑事裁判において証拠として認められる範囲を拡大すべきである」

(1998年前期JDA推薦プロポジション)

B部門：「日本は積極的安楽死を法的に認めるべきである」

(1998年第三回ディベート甲子園高校生の部論題)

日程

開会式	9:20
予選第一試合	9:45
昼食	11:30
予選第二試合	12:15
予選結果発表	14:30
決勝戦	15:00
表彰式	17:15
終了	17:30